

# 歴史

## 探訪

「つづくしまへの系譜」



川の流れを利用して、舟で荷物を運ぶことを「舟運」といいます。舟運は、かつて福島県においても、盛んに行われていました。阿武隈川の舟運がスタートしたのは、江戸時代に幕藩体制となり、年貢米の運送に使われるようになってからのことです。折しも今年、元禄15年(1702)板倉氏が福島藩に就封してからちょうど300年。ここでは、福島市教育委員会文化課長の柴田俊彰さんにお話を伺いながら、地域発展の原動力ともなった舟運の時代的役割と、これを礎としたまちづくりについて振り返ってみました。

### 物資輸送の革命 舟運の開始

信達地方(現在の福島市と伊達郡全体)は、寛文4年(1664)に、米沢藩領から江戸幕府が直接治める地域、天領になりました。この地方は、かつて会津の蒲生氏郷の支配下にあり、その後は米沢・上杉氏の領地であったため、領主への年貢米は陸上輸送で事足りていました。しかし天領入りとともに、幕府への年貢として、信達地方から江戸に廻米(産米を運ぶ)をする必要に迫られたのです。これがいわゆる「阿武隈川舟運」

平成9年、福島河岸にあった場所に、船着き場が再現されました。福島市では、阿武隈川舟運の歴史を学び、まちづくりへつなげようと、さまざまな働きかけを行っています(橋向こうの左奥が、かつて福島城があった現・福島県庁舎付近)



### 難所を乗り越え、米や商品を輸送

それでは、阿武隈川舟運のコースをたどってみましょう。福島河岸から河口の荒浜までの航路は、舟の運行や舟運の物資の積み出し方の違いで、大きく二つの地域に分けられます。まず、信達地方を通船する「福島河岸・水沢・沼ノ上河岸(現・宮城県丸森町)」の区間は、御城米輸送請負業者の渡辺家、のちに上総屋が管理していました。この区間では、浅瀬や急流でも通りやすいように工夫した「小鷄船」に、約四十俵の米を積んで運びました。そして水沢・沼ノ上河岸で、約百俵積める「ひらた船」に積み替え、河口の荒浜まで向かったといわれています。

## 板倉氏・福島藩就封から300年

# 地域発展の原動力

# 阿武隈川の舟運



阿武隈川舟運図(福島河岸)(福島市資料展示室蔵) 福島城に隣接した福島河岸(手前)にある蔵には、村々からの年貢米が運ばれました。一番左が福島藩主・板倉氏の城主蔵、あとは順に御城米御蔵、上総屋の船会所、米沢藩・上杉氏の米蔵が並んでいました



廻米旗(阿部和代氏所蔵) 幕府の御城米を運ぶ小鷄船に立てられた旗。日の丸の入ったこの旗を立てた廻米舟は、商人の舟よりも優先する権利を持っていました



「ここ福島河岸の対岸にあった天神河岸には、かつて、舟運の守り神である弁財天の堂がありました」と語る柴田さん



阿武隈川舟運で、難所と言われた猿跳峽(現・宮城県丸森町)の猿跳岩。ここには今も多くの岩場があり、その荒々しい岩肌が、往時の舟運の労苦をしるしをばさます



米沢藩年貢米蔵(福島市柳町) 米沢街道を通じて運ばれた年貢米がこの蔵に集められました



猿跳峽の絵図によると、この難所は舟運を妨げる巨石があり、川底を改修するなどして水路(絵図内の赤い線)をつくりました



舟運図を見ていくと、福島河岸のほか、現・福島市内にあった天神・渡利・瀬上の各河岸が黄色の楕円形の中に描かれています。沼上川との合流点にあった瀬上河岸は難所のため、航路が赤い線で描かれ、船乗りはこの線を頼りに米を安全に輸送しました



福島河岸から河口の荒浜までの阿武隈川舟運は、大きく次の二つに分けられます。福島河岸・水沢・沼ノ上河岸 水沢・沼ノ上河岸・荒浜 この区間は五十俵積みの子鷄船で米を運び、水沢・沼ノ上で百俵積みのひらた船に積み替え、河口の荒浜に向かいました。ここからさらに荷物積み替えを経て、松島湾の寒風沢島に運ばれ、さらに太平洋を南下し、江戸へと運びました

当時、上総屋がつくったと言われる「阿武隈川舟運図」をよく見ると、赤い線が描かれています。「これは難所の部分に、舟が安全に乗り切る水路を描いたもので、この線を頼りに船乗りは、積んだ米を安全に輸送したのです」と、柴田さんは話します。

現在の福島県庁舎一帯にあった福島城、その南に隣接する福島河岸には、福島藩主・板倉氏の蔵、幕府の御城米蔵(ここから舟運を利用した米沢藩の蔵があり、上総屋の船会所(今で言う運送業者の事務所)も軒を運んでいました。御城米を積み込んだ小鷄船に、日の丸の入った「廻米旗」を立て、いざ出航。沼上川と

の合流点にあたる瀬上河岸付近は、しばしば摺り上りから砂利や大石が押し出された難所。ここに来ると、流れを緩くするためにつくられた続杵(木材を組んで中に石を入れたもの)があり、船頭は進路を変えて杵の脇を通りました。そして難所といわれた猿跳峽を越えると、ほどなく仙台領に入り、水沢・沼ノ上河岸に到着します。

江戸時代の中ごろになると、福島藩内の舟運は廻米のほかに、養蚕の本場となった信達地方の蚕種(カイコの卵)、生産物や商品の輸送にも利用されるようになりました。阿武隈川の舟運は、福島の活発な産業活動を支える原動力となったのです。

明治になって舟運は続きました。東京方面からは日常品が運ばれてくるようになり、福島河岸周辺には倉庫が多く見られました。しかし明治20年(1887)に東北本線が開通すると、物資輸送の主役は鉄道へと移り、徐々に舟運は衰えていったのです。

明治32年(1899)、東北で最初の日本銀行の店舗として、福島出張所が開設されました。店舗は蚕物業の「万国屋」を改造したものでした。全国的にみても早い時期に日銀の出張所が開設されたのは、福島が当時の重要輸出品であった生糸や米穀の集散地であり、東北の金融の中心であったためです。そして今もなお、福島河岸の脇には旧日本銀行福島支店長役宅が残されています。20世紀の福島県の産業を語るとき、まず第一に登場する蚕糸業は、明治時代の国策の王道をゆく、当時の先端産業でした。その礎を築いた信達地方の養蚕活動を流通面で支えてきたのが、阿武隈川舟運であったことは、言ってもよいかもしれません。

福島河岸があった現在の御倉町。その名前の由来は、「河岸に蔵があった」ことにあります。舟運によって築かれた福島の付まいは、河岸近辺の蔵に、その面影を見ることが出来ます。そして福島河岸には船着き場が再現され、往時をしる市民が訪れています。柴田さんは、「現在、福島市では、阿武隈川サミットや、福島市の歴史と文化を知ることから未来のまちづくりを考える。川から陸へのまちづくりを推進しています」と話します。まちの成り立ちや付まいを大切にしたい。そんな想いは、明日へと受け継がれてゆきます。愛すべきふるさとを歴史を知り、学ぶことが、21世紀のまちづくりへとつながってゆくことを夢見ながら。

### 舟運の歴史を21世紀のまちづくりへ